

下大類芹沢遺跡2

—倉庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2022

株式会社シン技術コンサル
高崎市教育委員会

例　　言

1. 本書は倉庫建設に伴い実施された、「下大類芹沢遺跡第2次調査」(高崎市遺跡番号851)の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の所在地は、群馬県高崎市下大類町1258番地1である。
3. 発掘調査は、令和4年8月17日から令和4年9月7日まで実施した。
4. 発掘調査および整理作業は高崎市教育委員会の指導・助言及び監督のもと、株式会社有賀園不動産から委託を受けた株式会社シン技術コンサルが実施した。
5. 調査体制は以下の通りである。

高崎市教育委員会

株式会社シン技術コンサル 福嶋正史、小林正輝

6. 本書の編集は、福嶋、坂本勝一((株)シン技術コンサル)が行った。執筆は、第1章を高崎市教育委員会、第VI章を(株)パリノ・サーヴェイが行い、それ以外を福嶋が行った。
7. 本調査における図面・写真・出土遺物は、高崎市教育委員会で保管している。
8. 発掘調査参加者・整理作業参加者については、以下の通りである。(敬称略・五十音順)

<発掘作業参加者>

黒沢日出夫、小島輝久、佐藤和子、高山紗弓、塚越昇、角田令子、花田暁美、
毒島義道、村田勝司、横堀久子

<整理作業参加者>

新井かおり、池田敏雄、岡田雄飛、尾崎志保里、木村真弓、國定亜季、佐藤久美子、佐藤美帆、
鈴木幸見、田島直美、茂木めぐみ、六反田達子

9. 発掘調査の実施および本書の刊行にあたり、下記の諸氏・諸機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。(敬称略)
梶原文化財調査室、高崎工業団地造成組合、大和ハウス工業株式会社

凡　例

1. 本書掲載の第1図・第3図は国土地理院発行1/25,000地形図『高崎』・『前橋』を、第4図は高崎市発行1/2,500都市計画基本図を使用した。また、第2図は「日本地質学会第100年学術大会講演要旨」に使用された図を改変したものである。
2. 遺構平面図に示した方位は座標北であり、水準線は標高を示す。座標については世界測地系に基づく平面直角座標第IX系を使用した。
3. 土層および遺物の色調は『標準土色帖』(農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所23版)による。
4. 本書における遺構種類の略号は、SD=溝、P=ピットである。
5. 火山噴出物の表記は下記のとおり略号を用いた。
浅間 A 軽石 =As-A (天明3年:1783年) 浅間 B 軽石 =As-B (嘉承3年、天仁元年:1108年)
浅間 C 軽石 =As-C (3世紀末~4世紀初頭) 浅間 - 板躑黃褐色軽石 =As-YP (1.5~1.65万年前)
6. 遺物番号は遺構図・遺物実測図・観察表・写真図版において共通である。
7. 写真図版における遺物写真の縮尺は、遺物実測図と同じである。
8. 遺物観察表の計測値欄において、()内の数値は推定値または残存値を示す。

目 次

例 言	
凡 例	
目 次	
第I章 調査に至る経緯	1
第II章 遺跡の立地と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第III章 調査の方法と経過	7
第1節 調査の方法	7
第2節 調査の経過	8
第IV章 基本層序	9
第V章 検出された遺構と遺物	10
第1節 溝	10
第2節 ピット	14
第3節 As-B 下旧地表面	14
第4節 As-A 復旧溝	17
第VI章 自然科学分析	18
第1節 はじめに	18
第2節 試料	18
第3節 分析方法	18
第4節 結果	18
第5節 考察	19
第VII章 まとめ	22
第1節 As-B 下旧地表面について	22
第2節 SD1 について	22
写真図版	
報告書抄録	

図版目次

第1図 遺跡位置図	1	第9図 SD1出土遺物	12
第2図 高崎地質断面図	2	第10図 SD2	13
第3図 周辺の遺跡	4	第11図 SD2出土遺物	13
第4図 調査区位置図	7	第12図 P1	14
第5図 調査区座標図	8	第13図 As-B下旧地表面検出遺構	15
第6図 基本土層柱状図	9	第14図 不明痕跡	17
第7図 As-B下旧地表面全体図	11	第15図 As-A復旧溝	17
第8図 SD1	12	第16図 各地点での植物珪酸体含量	20

表目次

第1表 周辺の遺跡(1)	5	第5表 ピット観察表	14
第2表 周辺の遺跡(2)	6	第6表 植物珪酸体分析試料	18
第3表 出土遺物観察表(1)	12	第7表 植物珪酸体含量	19
第4表 出土遺物観察表(2)	13		

写真目次

PL.1	PL.4
調査区遠景(西から)	畦畔様盛土(南から)
調査区全景(上が北)	畦畔様盛土断面(南から)
	切土跡と微高地(南東から)
PL.2	切土跡断面(南から)
調査区完掘状況(東から)	不明痕跡(北東から)
SD1 完掘状況(南から)	調査区南東端基本土層(北から)
	SD1出土遺物
PL.3	SD2出土遺物
SD2A 完掘状況(南東から)	
SD2B 完掘状況(南東から)	PL.5
SD2B 断面(南から)	植物珪酸体
P1 完掘状況(南から)	
As-B下旧地表面(低位部 南から)	

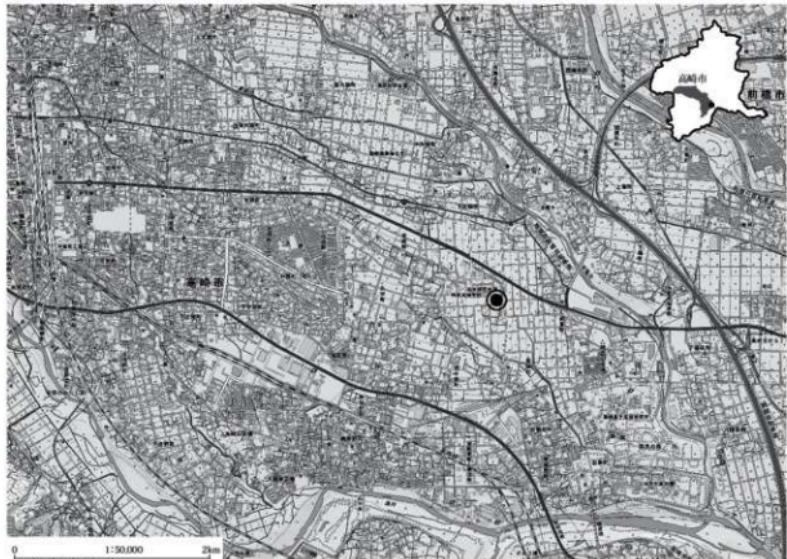
第Ⅰ章 調査に至る経緯

平成30年7月、高崎工業団地造成組合（以下、高工団と略）より高崎卸売市場の周辺にて産業団地造成に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課（以下、市教委と略）にあった。周辺は集落跡やAs-B下水田址などの遺跡が分布する地域であり、周知の埋蔵文化財包蔵地も存在するため、埋蔵文化財取扱の協議が必要であると伝えた。

平成31年4月、産業団地用地内の道路整備等に伴う発掘調査事業を開始するとともに、事業地内の試掘・確認調査もを行い、遺構が検出された範囲については周知の埋蔵文化財包蔵地を拡大する手続きを行った。

令和4年6月9日、事業者である株式会社有賀園不動産から、この産業団地において倉庫建設工事の計画があると高工団を通じて市教委に連絡があった。該当地は周知の埋蔵文化財包蔵地である下大類33遺跡内に所在するため、工事前に文化財保護法第93条第1項の規定による届出が必要であることを伝え、事業主と保存協議を行った。該当地では確認調査の結果、As-B一次堆積層が認められ、その下位に水田と推定される旧地表面が確認されていたが、建物工事部分について現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。文化財保護法第93条第1項の届出は令和4年6月27日に提出された。なお、遺跡名については「下大類芹沢遺跡第2次調査」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要綱」に準じ、令和4年7月27日に事業者：株式会社有賀園不動産・民間調査機関：株式会社シン技術コンサル北関東支店・市教委での三者協定を締結、事業者と民間調査機関の間で発掘調査の契約を締結し、調査実施にあたっては市教委が指導・監督することになった。



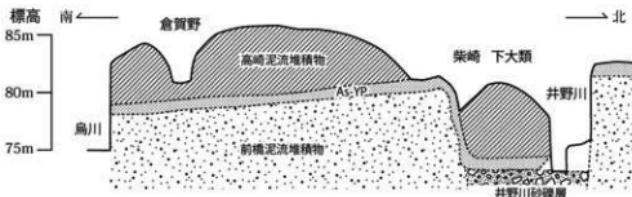
第1図 遺跡位置図

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

高崎市は榛名山、妙義山をはじめとする群馬県西部の山々を背にした、関東平野の北西端に位置する。高崎市の地形をみると、烏川右岸に八幡台地・觀音山丘陵が、左岸に相馬ヶ原扇状地末端の冲積地が、その南方には前橋台地が広がっている。前橋台地は、約2.2万年前の浅間山の噴火に伴う山体崩壊による前橋泥流堆植物によって基盤が構成されている。台地内には井野川が北西—南東方向に流れ、下流で前橋台地を倉賀野台地と前橋玉村台地に二分するとともに、右岸に段丘と谷底平野で構成される幅15kmほどの井野川低地帯を北西—南東方向に形成する。低地を含めて井野川右岸には前橋泥流層の上に1.5～1.65万年前のAs-YP（早田ほか2020）以後の高崎泥流と以後の洪水層が数メートルの厚さで堆積し、いわゆる高崎台地を形成している。井野川低地帯は相対的に低地となり、さらに高崎台地形成以後の洪水や旧河川の浸食により樹枝状の低湿地と微高地が複雑に入り組んだ地形が形成されている。

下大類芹沢遺跡は、市街中心部から東南東5km程の市域東部にあり、井野川から西方に約1kmの井野川低地帯の内に位置している。遺跡の北方約1.2kmには近世以前から整備・利用されてきた「地獄堰」が井野川に注ぎ、南方約500mには同じく「矢中堰」が東流する。周辺は水田と住宅地が広がる郊外の景観を呈していたが、近年に至り広域幹線道路国道354号の供用開始と高崎玉村スマートIC新設、および周辺区画整備が行われ、急激に開発が進行している。井野川東西には大規模な工業団地・産業団地が造成されつつあり、本調査の原因となった倉庫建設工事もこれら開発の一環とみることができる。



第2図 高崎地質断面図

第2節 歴史的環境

上述のように高崎台地を形成する高崎泥流はAs-YP降下以後であるため、その範囲では旧石器時代の遺跡はこれまで確認されていない。南方の烏川沿岸に位置する岩坂上北遺跡で、後期旧石器時代終末期の尖頭器が1点出土するにとどまる。

縄文時代の遺跡は、本遺跡周辺では元島名瓦井遺跡(28)で縄文草創期の尖頭器が出土しており、これが最古の遺物である。宿大類西遺跡(12)、柴崎村間遺跡(53)等では前期の遺物が出土しており、この時期から中期までは比較的安定して遺物が発見される。中期後半～後期初頭が遺構・遺物数のピークで、井野川段丘上にある高崎情報団地II遺跡(26)、万相寺遺跡(24)等で縄文中期～後期の集落が形成される。後期後半になると再び遺跡が激減し、高崎情報団地遺跡I(25)以外で該期の遺跡はみつかっていない。なお、図示はしなかったが本遺跡でも縄文前期と推定される土器破片が出土している。

弥生時代の遺跡は、中期後半以後からのものが確認されている。鈴ノ宮遺跡(27)では中～後期の住居

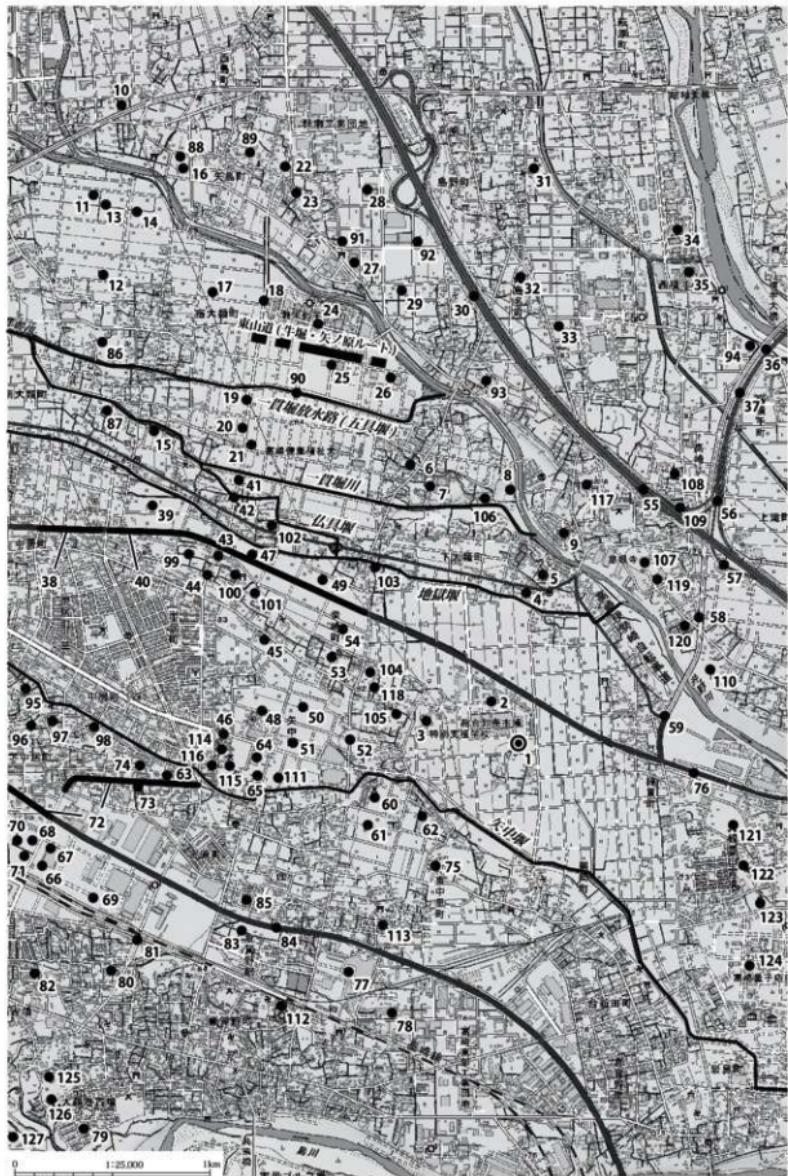
跡が 26 軒、前方後方形を含む方形周溝墓 7 基、壺棺墓 1 基が検出され、当時の拠点的集落であったことが想定される。このほか、元島名遺跡（29）では方形周溝墓と壺棺、高崎情報団地 I 遺跡や宿大類村西遺跡では後期の方形周溝墓と住居跡、万相寺遺跡では後期の住居跡が検出されている。これらはいずれも井野川沿岸段丘上に形成された遺跡で、旧一貫堀川との合流点より上流に位置する。後期では集落規模が拡大するとともに遺跡数も増加するが、井野川下流域では遺跡がみつかっていない。

古墳時代は本遺跡を含む井野川流域に初現期から遺跡が形成される。本遺跡至近の柴崎熊野前遺跡（3）では古墳時代最古段階の土器が出土し、左岸段丘上には県内最古級の元島名将軍塚古墳（117）が築かれる。後続する前期古墳では「□（正）始元年」銘の三角縁四神四獸鏡が出土した柴崎蟹沢古墳（118）が上記柴崎熊野前遺跡の西方約 300 m に位置する。中期～後期では、5 世紀代に相次いで築造されたとみられる普賢寺裏古墳（122）、岩鼻二子山古墳（124）、不動山古墳（123）、6 世紀後半の綿貫觀音山古墳（121）など綿貫古墳群が井野川右岸に、6 世紀後半の前山古墳（119）や御伊勢山古墳（120）、上滝・下滝古墳群が左岸に、それぞれ築造される。また、高崎情報団地 I 遺跡では帆立貝形古墳を中心とした初期群集墳が確認されている。なお、本遺跡の東方 100 m にも、削平・消滅した古墳があったことが記録されている（群馬県古墳総鑑：大類村 12 号墳）が、詳細は不明である。古墳以外では、井野川右岸の高崎情報団地 I 遺跡で弥生～古墳中期の集落と墓域が、上滝町北遺跡（56）で集落と弥生～古墳後期の水田址、中大類金井遺跡（6）、中大類金井 II 遺跡（7）、下大類遺跡（2）、綿貫遺跡（76）等で集落が検出されている。また、未報告ではあるが、国道 354 号沿いの流通団地造成に伴い、井野川右岸段丘上に広がる大規模な集落遺跡が確認されている。左岸では、上滝五反畑遺跡（57）、宿横手三波川遺跡（37）、西横手遺跡群（36）等で水田址が検出されている。

奈良・平安時代になると条里制の導入によって土地割りの整備が進み、本遺跡周辺の上大類・中大類・下大類・柴崎・矢中地区周辺では As-B 下水田が広範囲かつ普遍的に確認され、12 世紀までの間に急速に開発が進行したことを示している。これらの水田開発に伴って水路の整備も行われ、地形の傾斜に沿って西北西～東南東方向に流れる基幹水路から水量を調節する水溜めを経て下流へ分配する施設が矢中村東 A 遺跡（60）でみつかっている。この水溜め遺構底面から「物部私印」と彫られた銅印が出土しており、矢中地域の開発・経営に物部氏が関わっていたことが推定されている。集落遺跡の分布は綿貫地区周辺から西方へ広がり、本遺跡周辺では下大類遺跡、綿貫小林前遺跡（59）、柴崎熊野前遺跡等で集落跡が確認されている。井野川左岸は段丘上の同一遺跡で古墳時代と古代の両時代に集落が営まれる例が確認されており、右岸とは異なる様相を示している。これらの遺跡のうち鉢ノ宮遺跡では「大□伴」の刻書がある瓦が出土しており、同遺跡南を通る東山道駿路（牛堀・矢ノ原ルート）との関連が想定される。なお、この東山道駿路は高崎情報団地 I 遺跡を横断しているが、同遺跡範囲内で 7 世紀の古墳を乗り越えて構築されている。

中世以降、当地域では館や城が微高地を中心に多く築造される。最も古いものは上滝中屋敷（109）で、南北朝までさかのぼると推定されている。宿大類町の塚ノ越屋敷（90）も鎌倉攻めに参加した武将の屋敷とみられ（長井・神戸 1997）、ほぼ同時期である。室町～戦国期は本遺跡至近にある大下屋敷（105）をはじめ、進雄（すそのお）神社神官である高井氏の屋敷跡である高井屋敷（100）、同じく柴崎西浦屋敷（99）や、柴崎桜井屋敷（101）、下滝館（110）、慈眼寺（107）、大類城（86）、矢島西城（88）など非常に密度で館・屋敷・城が構築される。その多くは初現が戦国期と推定されるが、その背景には越後上杉氏と後北条氏、さらに武田氏による三ツ巴の抗争の舞台となった地理的要因がある。

近世では「天狗岩用水（現滝川）」が井野川左岸に開削され、安定した耕作を行っていた様子が上滝町北遺跡等で確認できる。天明三（1783）年の As-A で覆われたものの、溝を構築して軽石を除去し農地を復旧した遺構（復旧溝）が各所でみつかっており、復旧の努力がみられない As-B 降下時と対照的である。



第3図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡（1）

No.	遺跡名	主な時代	主な遺構	報告書・文献等
1	下大船原古道跡 2	古代・近世	古墳溝・近世溝	—
2	下大船跡	古墳・古代	古墳住居・古代住居	1978年小牧委調査
3	東崎廻廊前遺跡・東崎廻廊前遺跡Ⅱ	古墳・近世	自然河岸・古墳住居・B下水田・中世廻廊・A上塙	1998・2011年市教委報告書刊行
4	下久留・中治Ⅱ遺跡	古墳・古代	古墳中期・土壙・古代廻廊	2010年市教委報告書刊行
5	下大船跡古道跡	國文・古代	古墳・古墳住居・古代住居	1992年市教委報告書刊行
6	中大船金井遺跡	國文・中世	古墳住居・古代住居	1988年市教委報告書刊行
7	中大船金井Ⅱ遺跡	古墳・古代	古墳住居・古代住居・溝	1991年市教委報告書刊行
8	中大船船形遺跡	古墳・古代	古墳住居・古代住居	1988年市教委報告書刊行
9	元島名下大船跡	國文・古代	古墳住居・古代住居	1992年市教委報告書刊行
10	新保八尻遺跡	古代	B下水田	新編「高崎史」資料編Ⅱ
11	大田・下畔遺跡	古墳・中世	古代住居・瀬戸・水田・中世廻廊・廻廊・井戸	1983年市教委報告書刊行
12	大田廻廊内遺跡	國文・中世	國文・古墳住居・方形廻溝渠・大船城	1987年市教委報告書刊行
13	大田遺跡Ⅱ	古代・中世	B下水田・古代住居・廻廊	1984年市教委報告書刊行
14	村北・久須前・村北遺跡	國文・弥生・古代・中世	B下水田・古代住居・廻跡	1985年市教委報告書刊行
15	南大船村南遺跡	古代・近世	古代住居・中世廻廊	1994年市教委報告書刊行
16	久島村西・増子遺跡	國文・古墳・古代	國文住居・古墳住居・古代住居・城跡	1986年市教委報告書刊行
17	山田・丸山遺跡	國文・古代	國文住居・古代住居・B下水田	1984年市教委報告書刊行
18	大神久保遺跡	國文・古代	古代住居・B下水田	1985年市教委報告書刊行
19	南大船町の遺跡	弥生・古墳	方型廻溝渠・B下水田	1997年市教委報告書刊行
20	南大船廻廊跡	國文・古代	古墳住居・古代住居・B下水田	1997年市教委報告書刊行
21	南大船北川・船形遺跡	弥生・古代	方型廻溝渠・古墳住居・B下水田	1997年市教委報告書刊行
22	久須竹・八尻遺跡	弥生・古墳・近世	方型廻溝渠・弥生住居・弥生廻溝渠・古代住居	1988年市教委報告書刊行
23	久島町南側遺跡	弥生・古代・中世	弥生住居・古墳住居	1994年市教委報告書刊行
24	万相寺寺道跡	國文・中世	國文住居・弥生住居・古墳住居・古代住居	1985年市教委報告書刊行
25	高崎遺跡切込Ⅰ遺跡	國文・中世	國文住居・弥生住居・古墳住居・古墳・古代住居・B下水田	1997年市教委報告書刊行
26	高崎遺跡切込Ⅱ遺跡	國文・中世	國文住居・弥生住居・古墳住居・古墳・古代住居・B下田畠	2002年市教委報告書刊行
27	宮之玄遺跡	弥生・中世	弥生住居・前歩道・方型廻溝渠・古墳住居・平安往耕	1978年市教委報告書刊行　飛鳥頃記載
28	元島名井山遺跡	國文・古墳・中世	圓周溝渠・B下水田	1995年市教委報告書刊行
29	元島名道跡	弥生・中世	門形廻溝渠・方型廻溝渠・廻廊・城跡	1979年市教委報告書刊行
30	元島名 B 道跡	中世	廻廊・社建物・堀	1977年市教委報告書刊行
31	野野村東廻廊	古代	B下水田	1988年市教委報告書刊行
32	元島名北山遺跡	古代	B下水田	1992年市教委報告書刊行
33	野野村中廻廊	古墳・中世	FA下水田・B下水田・中世墓	1992年市教委報告書刊行
34	西野千瀬跡（Ⅱ）	古墳・中世	FA下水田・B下水田・溝	1996年市教委報告書刊行
35	西野千瀬跡（Ⅰ）	古墳・中世	廻溝渠・FA下水田・B下水田・中世墓	1989年市教委報告書刊行
36	西野千瀬跡Ⅲ	古墳・中世	FA下水田・FP下水田・古代住居・城跡	2000年市教委報告書刊行
37	砂根町・大波川遺跡	古墳・近世	FA下水田・FP下水田・B下水田・中世墓・近世墓	2000年市教委報告書刊行
38	豊堅山廻廊Ⅱ・直道跡	古墳・近世	古代住居・B下水田	1993年市教委報告書刊行
39	西野・朝日・吹子西山遺跡	古代	B下水田・水路	1987年市教委報告書刊行
40	野町山廻廊Ⅰ・Ⅱ	古墳・近世	古代住居・B下水田	1987年市教委報告書刊行
41	東崎廻廊切込Ⅴ	古墳・古代	古墳住居・古代住居	1988年市教委報告書刊行
42	東崎町 A・B・吹子西山D 遺跡	古墳・古代	古墳・古墳住居・B下大型水路・B下水田	1998年市教委報告書刊行
43	西野・朝日・吹子西山C 遺跡	古墳	方型廻溝渠・溝	1992年市教委報告書刊行
44	西野・吹子西山跡	國文・古墳・近世	方型廻溝渠・古代住居	1991年市教委報告書刊行
45	大王前遺跡	古墳・中世近世	B下水田・大型水路・池状廻渠・A下塙	1982年市教委報告書刊行
46	竪島寺裏遺跡	古墳・中世	古代住居・B下水田・城跡	1983年市教委報告書刊行
47	東崎廻廊切込Ⅵ	古墳・古代	B下水田	1986年市教委報告書刊行
48	矢ヶ村北 A・天王前遺跡	古墳・近世	B下水田・大型水路・A施理塙	1983年市教委報告書刊行
49	東崎廻廊切込Ⅶ	古墳	B下水田	1985年市教委報告書刊行
50	東崎町・村北 B 遺跡	古代	B下水田	1982年市教委報告書刊行
51	下村北遺跡	古墳・中世	B下水田・城跡	1983年市教委報告書刊行
52	今穴遺跡	古墳・中世	古墳	1983年市教委報告書刊行
53	東崎村風呂跡	國文・古墳・中世	溝・井戸・土塙	1989年市教委報告書刊行
54	奈幡遺跡Ⅰ	古代	B下水田	1984年市教委報告書刊行
55	上湖遺跡	國文・古墳・古代・近世	古墳住居・城跡	1981年市教委報告書刊行
56	上海柳町北遺跡	國文・中世	古代住居・FA下水田・B下水田・A下水田	2002年市教委報告書刊行
57	上湖丘上遺跡	古墳・古代・近世	FA下水田・B下水田・A下水田	1999年市教委報告書刊行
58	下湖大水路跡	古墳・中世	前廻溝渠・古墳住居・古代住居・中世廻渠	2004年市教委報告書刊行
59	御井小林古道跡	古墳・近世	古墳住居・古代住居・古代寺院	2006年市教委報告書刊行
60	久穴川 A 遺跡	古墳・古代	方型廻溝渠・B下水田・水路・物置田川上	1984年市教委報告書刊行
61	久穴川 B 遺跡	古墳・古代	方型廻溝渠・前歩道・方型廻溝渠・B下水田	1985年市教委報告書刊行
62	久穴川 C 遺跡	古墳・中世	方型廻溝渠・B下水田・城跡	1988年市教委報告書刊行
63	久穴川中野 I 遺跡	古代	B下水田	1996年市教委報告書刊行

第2表 周辺の遺跡（2）

No.	遺跡名	主な時代	主な遺構	報告書・文献等
64	久中村北C遺跡	古代・中世	B下水田、溝、堀、城跡	1983年市教委報告書刊行
65	久中村北B遺跡	古代	古代住居、B下水田	1984年市教委報告書刊行
66	久中村南遺跡	古代・中世	B下水田、水田	2020年市教委報告書刊行
67	京原町西跡	古代・中世・近世	古代住居、B下水田、溝、A廻田溝	2016年市教委報告書刊行
68	京原町西跡2	古墳・近世	B下水田、A廻田溝	2016年市教委報告書刊行
69	京原町西跡3	古墳・中世・近世	B下水田、溝	2019年市教委報告書刊行
70	下之郷東遺跡	古墳・古代・近世	B下水田、溝、A廻田溝	1983年遺跡調査会報告書刊行
71	下之郷村東遺跡II	古代・近世	B下水田、A廻田溝	1984年遺跡調査会報告書刊行
72	下之郷北半遺跡	古墳・古代・中世	古墳住居、古代住居、B下水田、水田、地顕跡	1996年市教委報告書刊行
73	下之郷北半遺跡II	中世・近世	B下水田、水田、A下溝	1998年市教委報告書刊行
74	下之郷北半遺跡III	縄文・古墳・古代・中世	縄文住居、古墳住居、B下水田、溝	2003年市教委報告書刊行
75	東中生遺跡	古墳	F下水田	1989年市教委報告書刊行
76	糸原遺跡	古墳～古代	古墳住居、周溝、古墳外堀	1985年市教委報告書刊行
77	古賀野I・中瀬遺跡	古墳・中世	古墳住居、古代住居、中世大廻田塁	1996年市教委報告書刊行
78	古賀野東来生遺跡	古墳	B下水田	初版記載
79	古賀野坂口寺II遺跡	圓文・古墳・中世	圓文住居、古墳住居、方形周溝渠、中世屋敷	1994年遺跡調査会報告書刊行
80	古賀野坂口II遺跡	古墳	B下水田	2001年市教委報告書刊行
81	古賀野坂口古墳遺跡	古墳	B下水田、集石土塙	1999年市教委報告書刊行
82	古賀野下新垣遺跡	古墳	B下水田	2009年市教委報告書刊行
83	古賀野I・櫛越遺跡	古墳・中世	古墳住居	2014年市教委報告書刊行
84	古賀野坂口北遺跡	古墳・中世	B下水田	2006年市教委報告書刊行
85	古賀野下天神遺跡	古墳	B下水田	1994年市教委報告書刊行
86	人頭城	大正・昭和	城、土居、戸口、馬出、櫓小堀	新編「高崎市史」資料編3 1984・86年調査
87	人頭城	15世紀	城、土居、戸口	新編「高崎市史」資料編3 相台城記載
88	久島西城	中世	城跡	新編「高崎市史」資料編3
89	久島反町屋敷	中世	城跡	新編「高崎市史」資料編3
90	厚木越原城	14世紀	城	1993年調査「高崎情説地図」内
91	鶴芦原城	中世	城、月見櫓	新編「高崎市史」資料編3 1977年調査
92	元島名城	15・16世紀	城、土居、戸口、櫓小堀	新編「高崎市史」資料編3 1976・78年・調査
93	元島名内山	16世紀	城、土居、戸口	新編「高崎市史」資料編3 相台城記載
94	新民宿敷	中世	城跡	新編「高崎市史」資料編3
95	高岡城	中世	城跡	新編「高崎市史」資料編3
96	中川居留邸屋敷	中世	城跡	新編「高崎市史」資料編3
97	小川居留邸屋敷	中世	城跡	新編「高崎市史」資料編3 相台城記載
98	四郎屋敷	中世	城	新編「高崎市史」資料編3 1986年調査
99	安曇西御所屋敷	中世	城跡	新編「高崎市史」資料編3 1990年調査
100	高井屋敷	16世紀	二重堀、土居	新編「高崎市史」資料編3 相台城記載
101	豊岡坂片尾屋敷	文明6年(1474)	城、土居	新編「高崎市史」資料編3
102	单人屋敷	天文年間	二重堀	新編「高崎市史」資料編3 相台城記載
103	大久保町御所屋敷	中世	城、土居	新編「高崎市史」資料編3 相台城記載
104	蟹の御所	中世	城跡	新編「高崎市史」資料編3
105	大久保城	16世紀	二重堀、土居、櫓台	新編「高崎市史」資料編3
106	筒井御所	16世紀	城、土居	新編「高崎市史」資料編3 相台城記載
107	猪俣寺	室町の代～	寺跡、城跡	新編「高崎市史」資料編3 相台城記載
108	五加屋敷	16世紀末	城、土居、路	新編「高崎市史」資料編3
109	上野中村遺跡	南北朝期	城	新編「高崎市史」資料編3 1980調査
110	下野郡	文明9年(1477)	城、土居、戸口、井戸、別邸	新編「高崎市史」資料編3
111	下村北堀跡	16世紀	二重堀、戸口、井戸、別邸	新編「高崎市史」資料編3 1985年調査
112	我御寺	中世	城跡	新編「高崎市史」資料編3
113	東山平城	中世	城跡	新編「高崎市史」資料編3
114	立石寺寺内屋敷	中世	城	新編「高崎市史」資料編3
115	榮成居留敷	中世	城跡	新編「高崎市史」資料編3
116	立石寺寺内屋敷	中世	城跡	新編「高崎市史」資料編3
117	元島名古都摩古墳	前期	土体墳墓上部	1981年市教委報告書刊行
118	榮成御殿沢古墳	前期	土体墳墓上部(?)	新編「高崎市史」資料編3「御殿沢史」資料編3
119	前山古墳	6世紀後半	複数基の内部空洞穴式石室	新編「高崎市史」資料編3「御殿沢史」資料編3
120	御伊物山古墳	—	御伊物山頂上に廻転の前方後円墳	1.毛吉田類型 濱村(1号)
121	御伊物山古墳	6世紀後半	兩面斜め六式石室	新編「高崎市史」資料編3 原教委報告書刊行
122	井筒寺寺内屋敷	5世紀後半	聖心院主堂跡?	新編「高崎市史」資料編3
123	不動山古墳	5世紀後半	複数斜め六式石室	新編「高崎市史」資料編3
124	岩谷二・白山古墳	5世紀後半	舟形石室2基	新編「高崎市史」資料編3
125	小瀬谷古墳	5世紀後半	複数斜め六式舟形石室	新編「高崎市史」資料編3
126	大船谷古墳	前期末～中期初頭	聖心院主堂跡?	新編「高崎市史」資料編3
127	大谷古墳	前期末～中期初頭?	土体部分上部?	新編「高崎市史」資料編3

第Ⅲ章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

下大類芹沢遺跡は、平成29年に卸売市場周辺整備事業の一環として第1次調査を行い、今回の調査が第2次となる。今次調査は倉庫建設に伴い、基礎工事が遺構面にまでおよぶ建物範囲を調査対象とした。調査区は、東西33.9m×南北14.0mの不整台形を呈する。

表土からAs-B一次堆積層、または遺構確認面までの掘削は重機を使用して行い、その後人力で旧地表面、および遺構の検出を行った。As-B一次堆積層が確認された範囲では、同層中位までを重機で除去し、薄く残った軽石層を人力で掘削、除去して下位の黒色粘土層（VI層）の上面を旧地表面として精査した。As-B一次堆積が認められなかった範囲では、As-Bが混入するに似た橙色砂質シルト層（IV層）まで重機で除去し、下位に堆積する橙色～褐灰色砂質シルト（IX層）の上面を人力で精査して遺構の検出を行った。As-B一次堆積層が認められた範囲ではほぼ全面から湧水があり、特に調査区中央の低位部からの湧水が顕著であった。このため調査区壁際の一部には排水溝を掘削し、日中は電動ポンプによる排水を行ったが、翌朝には再び冠水するため、調査作業に多大な支障をきたした。検出された遺構は、スコップ、ジョレン、移植ゴテ等を用いて人力で掘削し、適宜土層の断面を記録した。作図作業は、トータルステーションを用いた機械測量と写真測量を併用した。写真撮影は、35mmモノクロネガフィルムを使用し、デジタル一眼レフカメラ（Canon 5D Mark II：2,110万画素）を併用した。遺構完掘後、高崎市教育委員会の終了確認検査を受け、RCヘリコプターによる空中写真撮影を行った。調査終了後は、埋め戻し・器材撤収を行い、現地作業を終了した。

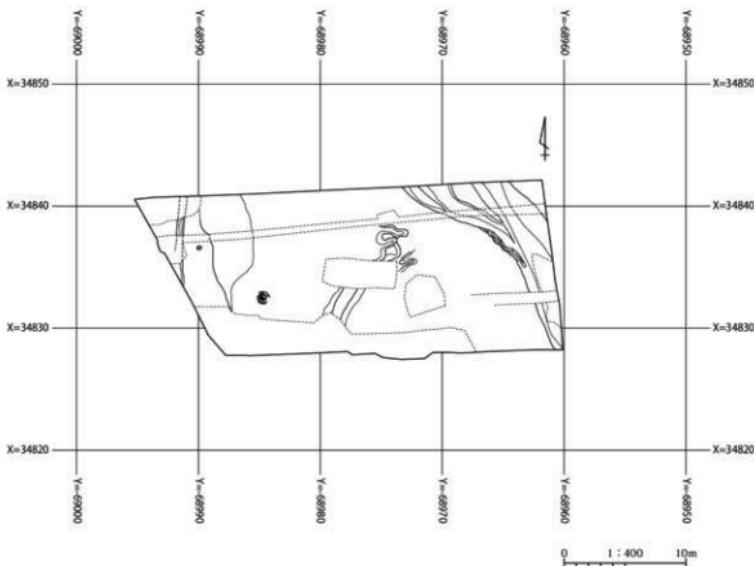
整理作業は、現地作業終了後ただちに着手し、遺構図面については調査時に取得したデジタルデータから作成した第一原図をもとに編集を行い、第二原図、及び掲載図版を作成した。出土遺物の水洗・注記を行い、接合を確認した後、実測と写真撮影を行った。遺構図面の掲載図版作成と遺物トレースはAdobe社のIllustrator Ver.CC（2021・2022）を使用し、遺物写真はデジタル一眼レフカメラ（Canon 6D：2,020万画素）で撮影し、Adobe Photoshop Ver.CC（2021）で加工編集を行った。報告書文章と挿表はMicrosoft365（Word/Excel）で作成し、これらをAdobe InDesign Ver.CC（2022）で版組みした。



第2節 調査の経過

令和4年

- 8月17日 器材搬入。仮設トイレ設置。重機による表土掘削開始。As-A 復旧溝検出。
- 8月18日 降雨のため掘削作業中止。As-A 復旧溝計測。
- 8月19日 重機による掘削再開。人力によるAs-B 除去作業開始。
- 8月22～26日 As-B 除去作業。旧地表面精査作業続行。SD2A、P1 掘削。
- 8月29日 降雨により調査区全体水没。調査区壁一部崩落。
- 8月30日 被害復旧作業。SD1 掘削。
- 8月31・9月1日 SD2B 掘削、各所断ち割り。調査区全体清掃作業。
- 9月2日 教育委員会による調査状況確認。空撮実施。降雨のため午後作業中止。
- 9月5日 調査区完掘全景写真撮影。器材撤収。
- 9月6日 重機による調査区埋め戻し開始。仮設トイレ汲み取り。
- 9月7日 仮設トイレ撤去。埋め戻し終了、重機回送。調査完了。

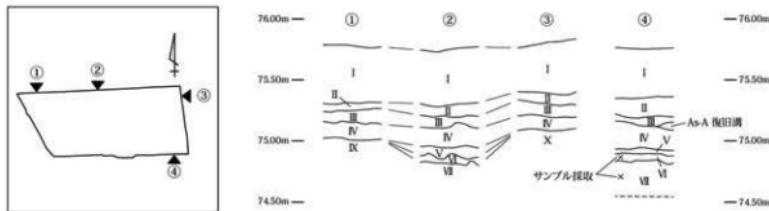


第5図 調査区座標図

第IV章 基本層序

本遺跡では、I～X層の基本土層を確認した。I～IV層は調査区全域で確認され、V層のAs-B一次堆積層からVI・VII層は調査区北東部、および西部を除く低位部で、逆にVIII～X層は高位部のみで確認された。

I層は表土で、主としてグラウンド造成時の盛土である。一部では盛土が2層あるが、時期差があるか否か不明である。II～III層はAs-Aを含む近世以後の耕作土である。酸化の多寡で分層したが、この違いが何に起因するものか不明である。III層下位にAs-Aの堆積が認められたが、確認できたものは全て二次堆積であった。復旧溝も本層下位に構築される。IV層はAs-Bが混じる黄橙色砂質シルトで、As-B一次堆積層の有無にかかわらず調査区全域で確認された。同テフラ以後の堆積であるが、古代の遺物は含まれていないため主として中世以後に堆積したと推定される。V層はAs-B一次堆積層である。場所によっては上面に橙色シルト塊が混入して攪拌されているが、下面近くには灰層が、また最下部には薄い炭化物層がそれぞれ確認されることから基本的に一次堆積とみられる。VI層は白色バミスを微量含む黒色粘土で、As-B下地表土である。白色バミスは、他の遺跡の例からAs-Cと思われる。VII層は褐灰色粘土である。部分的な深掘りでは、VI層との混交は認められなかった。VIII層は、調査区西部のみで確認された土層で、As-B層とIX層の間に堆積する。土師器片がわずかに出土していることから、古墳時代～古代の堆積と推定される。IX層は調査区北東部と西部で確認された。X層が攪拌された層と推定され、場所によってはAs-B層直下で検出された。上面は橙色に酸化する。X層は調査区東西の一部で確認された。As-YPと思われるバミスと黄橙色ロームブロックを含む高崎泥流層である。



- I層 黄褐色土（10YR5/6）盛土。
- II層 褐灰色砂質シルト（10YR4/1）綿まりやや強、粘性やや弱。As-A 粒 ϕ 1～5mm をやや多く含む。近世～近代以後の耕作土。
- III層 黄橙色砂質シルト（7.5YR7/8）綿まりやや強、粘性やや弱。As-A 粒 ϕ 0.5～3mm をやや多く含む。酸化部多い。近世～近代の耕作土。本層の下位にAs-A堆積。
- IV層 にぶい橙色砂質シルト（7.5YR6/4）綿まりやや強、粘性やや弱。As-Bをわずかに含む。酸化部多い。中世～近世の耕作土。
- V層 As-B純層。綿まりやや弱。一部酸化。
- VI層 黒色粘土（10YR2/1）綿まり強、粘性強。白色バミスをわずかに含む。As-B下地表土。
- VII層 褐灰色粘土（10YR6/1）綿まりやや強、粘性強。酸化鉄分を少量含む。
- VIII層 黑褐色粘質シルト（10YR3/2）綿まり強、粘性やや強。ローム（As-YP）粒 ϕ 5～10mmを少量、炭化物粒 ϕ 5mmをわずかに含む。主体はVII層が変質したものか。
- IX層 褐灰色シルト（10YR6/1）綿まりやや強、粘性強。酸化鉄分を少量含む。上面は橙色に酸化。
- X層 にぶい黄橙色粘質シルト（10YR7/2）綿まり強、粘性やや強。ローム（As-YP）粒・ブロック ϕ 5～20mmを少量含む。酸化鉄分を少量含む。高崎泥流層。

第6図 基本土層柱状図

第V章 検出された遺構と遺物

本遺跡で検出された遺構は、溝2条、ピット1基、およびAs-B下旧地表面における畦畔様盛土と切土跡、攪拌跡、不明痕跡、およびAs-A復旧溝である。溝はSD1がⅡ層下位で、SD2がAs-B下でそれぞれ検出された。ピットはAs-B下のⅨ層上面で検出された。As-B下旧地表面は、調査区中央部が谷状に低く、部分的に高低差10～20cm程度の凹凸がみられた。水田址の可能性を考慮しつつ表面を精査したが、検出された起伏・傾斜とともに水田としては過大で、明確な畦畔も検出できなかった。ただし、上記の盛土・切土・攪拌跡のほか、農機具の刃先痕や馬蹄跡が多数認められ、小形動物の足跡も検出されたことから、土地改良・改変行為がやや活発に行われていたことがうかがえた。

第1節 溝

SD1 (第8・9図、PL.2・4)

位 置 調査区北東部の微高地縁辺に位置し、調査区北壁から南東角まで続く。基本土層Ⅲ層下位で検出され、埋没後にAs-A復旧溝が構築されている。

形状・規模 2条の溝が新旧関係をもって重複し、調査区北壁付近では二又に分かれ、検出範囲中ほどで合流する。北西—南東方向に延び、南端は調査区南東角付近で東へ屈曲する。検出長は16.49m、幅4.2～5.2m、深さは調査区東壁で0.21mを測る。溝の方向はN-42°～Wを指す。断面形は逆台形で、溝底平面形はY字状を呈する。底面は北西から南東へ緩く傾斜する。上端西縁際に細い溝状遺構を伴う。平面形・底面ともに乱れることから植栽痕とも考えられる。

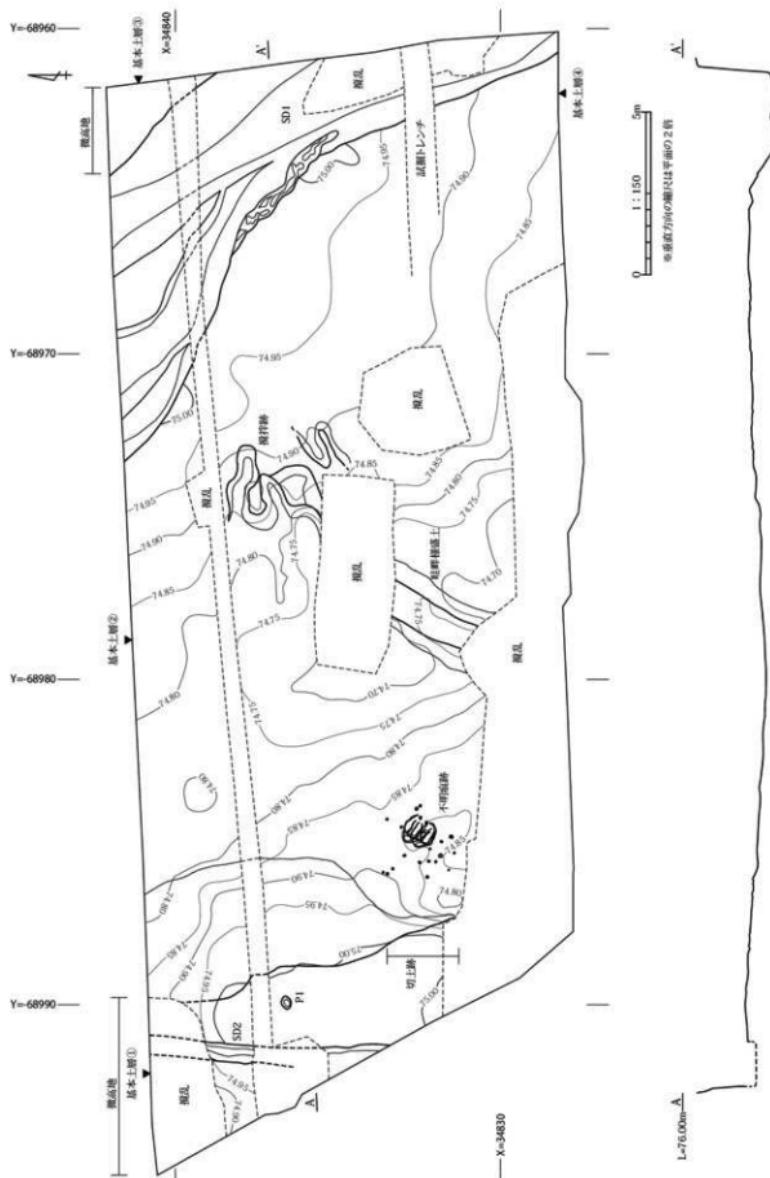
覆 土 覆土はほぼ水成堆積と思われ、褐灰色砂質シルトを主体とする。下部は砂をやや多く含む。覆土上位～底面にかけて陶磁器破片が20点余り出土しており、特に底面近くから出土した遺物が構築・供用年代を示すと思われる。これらのうち3点を図示した。1は端折り皿で、浅黄色を呈し無文である。底面の内外面にトチン痕が残る。2は鉢で、口径は推定で約35cmである。外面は無文、内面に櫛目文と辰砂軸を施す。3は陶器擂鉢で、口径は推定約30cmを測る。内面に雑な櫛目を施す。1・2は17世紀前半、3は18世紀前葉のものとみられる。陶磁器以外では、西縁付近の一部に集中して動物骨が出土した。異種動物の骨が少量ずつ確認されたことから埋葬ではなく、廃棄されたものと推定される。また、縄文土器破片と土師器破片が覆土に混入していた。

時 期 As-A降下以前の構築であることが確実で、同テフラ降下時にはすでに埋没していた。出土した陶磁器から17世紀前半の構築と推定される。

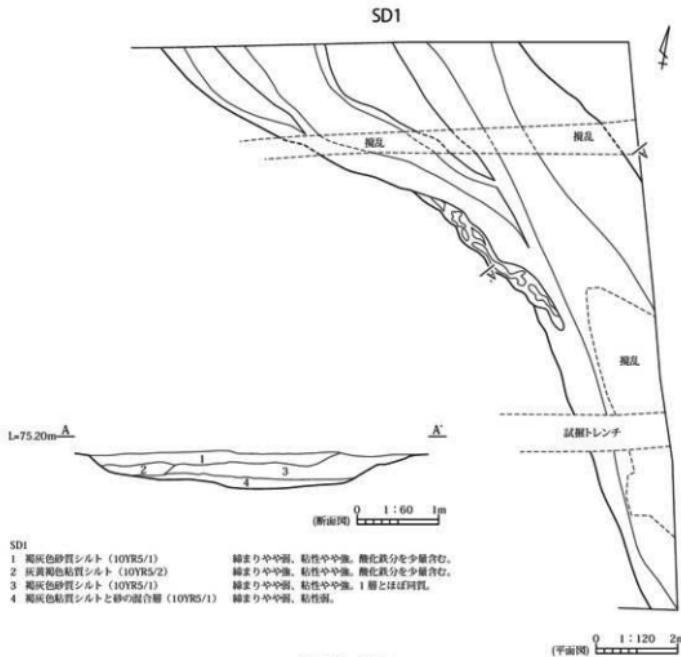
SD2 (第10・11図、PL.3・4)

位 置 調査区西端近くで検出された南北方向の溝である。北端と西縁は搅乱で壊され、全体形状は不詳である。調査区北壁で本溝の断面が確認できる。

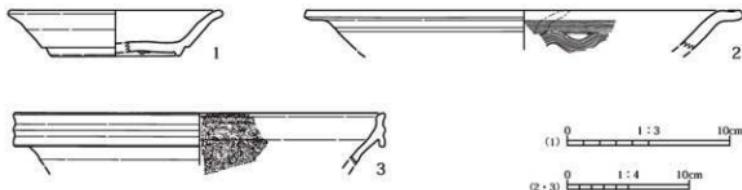
形状・規模 直線的な溝と思われ、南北ともに調査区外へ延びる。方向はほぼ真南北を指し、検出長は6.32mを測る。As-B直下のⅨ層上面で検出され、微高地の縁辺に構築されたものである。As-Bで埋没していたが、同テフラ降下以前に遺構内に暗褐色土が堆積しており、構築はそれより若干遅る。As-B降下時の形状をSD2A、構築当初の形状をSD2Bとしてそれぞれ記録した。SD2Aは幅0.54m、深さ0.2mを測り、断面形状は半円状を呈する。降下時に漏水し



第7図 As-B下旧地表面全体図



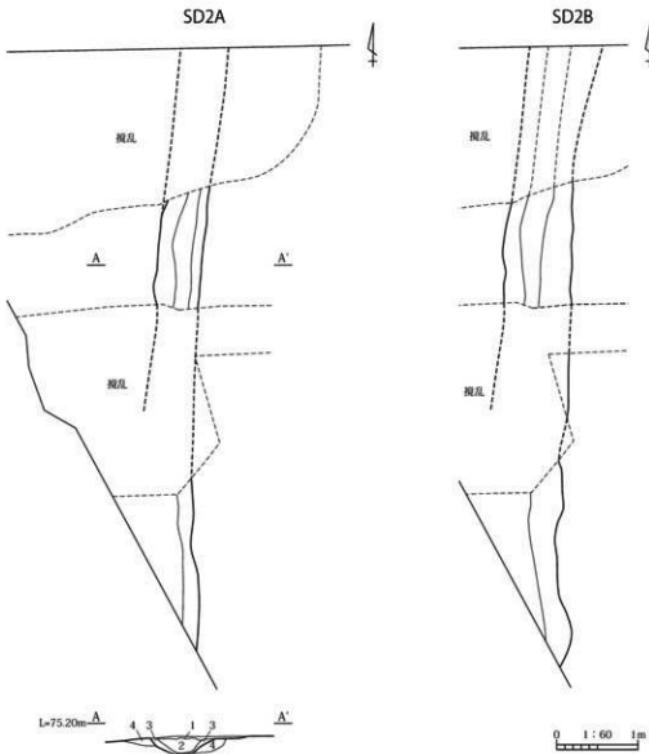
第8図 SD1



第9図 SD1 出土遺物

第3表 出土遺物観察表(1)

No.	種別 器種	出土 位置	計測値 (cm・g) 残存 色調 (外側・内側) / 織成	胎土	特徴・調整・文様等
1	陶器 縦折り皿	SD1	口:(12.8) 高:(2.9) 底:(7.8) 最大径:- 口縁一部破片 外:浅黄色 内:浅黄色 ／ 良好	チャート	灰釉施釉。 底面内外面に円錐ビン付き輪トタン痕。 窓口美濃産。17世紀前半。
2	陶器 鉢	SD1	口:(35.6) 高:(4.3) 底:- 最大径:- 口縁一部破片 外:浅黄色 内:浅黄色 ／ 良好	石英、黒色粒	灰釉施釉。内面に磨口文、豆砂輪による下駄付け。 窓口美濃産。17世紀前半。
3	陶器 盤	SD1	口:(30.2) 高:(4.3) 底:- 最大径:- 口縁一部破片 外:褐灰色 内:深い赤褐色 ／ やや良	石英、チャート、白色粒	内面に11条1単位の櫛目。 丹波産。18世紀前半。



第10図 SD2



第11図 SD2 出土遺物

第4表 出土遺物観察表(2)

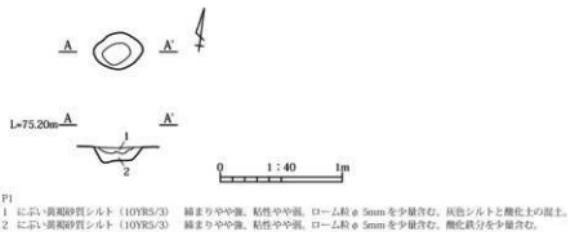
No.	種別 器種	出土 位置	計測値 (cm・g) 残存 色調 (外側・内側) / 燃成	粘土	特徴・調整・文様等
4	漆器 环か	SD2B	口: - 高: 0.5 厚: - 最大径: - 体部破片 外: 底白色 内: 底白色 / 良好	石英、長石、 白色粒	口クロ整形。

ていた様子は認められなかった。SD2B は幅 0.84 m、深さ 0.22 m を測り、断面形状は弧状を呈する。SD2A・SD2B ともに底面の傾斜はほとんどない。

覆 土	SD2A 覆土は As-B 一次堆積で、上面は橙色粘土が混交する。SD2A 下の SD2B 覆土は基本土層 VI 層に灰色砂質シルトが混じった土で、厚さは 3 ~ 5cm を測る。なお、溝両脇の IX 層が灰褐色に変色している。
遺 物	SD2B 覆土から須恵器破片が出土した。4 は須恵器壺または椀とみられる。口縁部・底部とともに欠損しているため正確な器形は不明である。遺構より古い時期のものである。
時 期	As-B 降下以前の構築で、供用中に同テフラで埋没しているため、11 世紀末～12 世紀初頭である。

第 2 節 ピット (第 12 図、PL.3)

本遺跡で確認されたピットは 1 基で、調査区西部の微高地で検出された。IX 層上面で検出されたが As-B 一次堆積層が残存しない範囲内であるため、正確な構築時期は不明である。形状からは柱穴とは考えにくく性格不明である。覆土中から須恵器破片が出土しているため、古墳時代以降の構築と思われる。計測値は第 5 表に示した。



第 12 図 P1

第 5 表 ピット観察表

No.	位置	検出面	平面形状	断面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	重複関係・備考
1	微高地	IX 層上面	不整円形	U 字形	0.4	0.3	0.12	柱穴か

第 3 節 As-B 下旧地表面

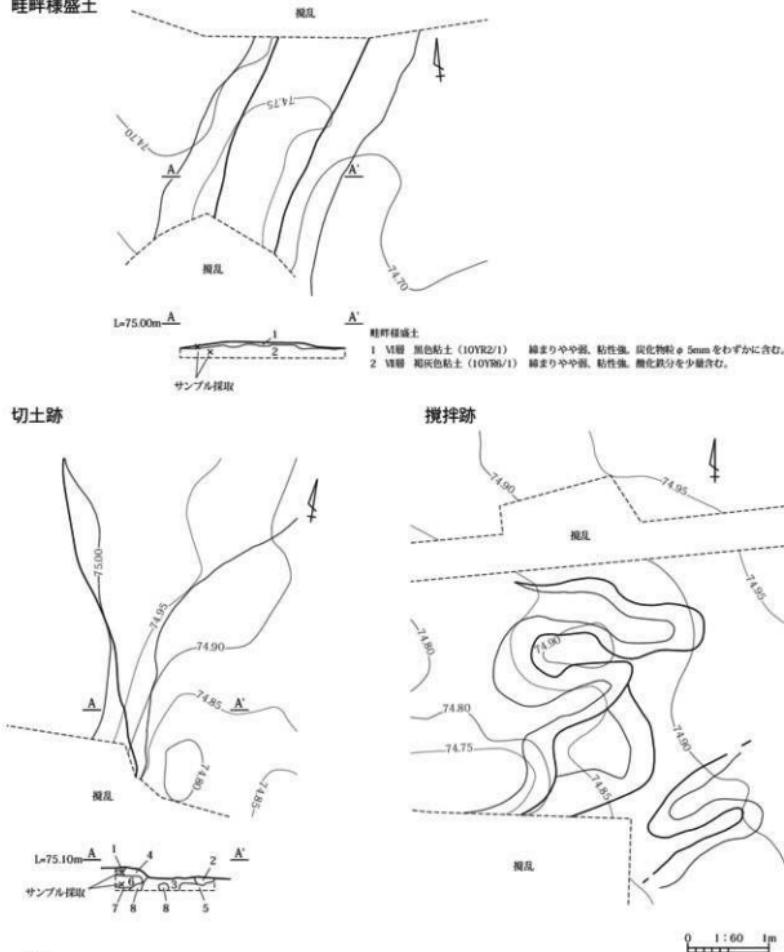
畦畔様盛土 (第 13 図、PL.4)

位 置 調査区中央部南端近くで検出された。旧地表面低位部のほぼ中央に位置する。

形 状・規 模 直線的な土手状の盛土であるが、攪乱によって大きく壊されているため全体の様相は不明である。上端幅 0.83 ~ 1.04 m、下端幅 1.88 ~ 2 m、高さ 0.08 m、断面形は台形を呈する。方向は N-33° - E を指す。旧地表面の谷に対して直交し、谷を画するようにもみえる。検出長は 3.55 m である。盛土両脇の旧地表を削り、その土を盛り上げて構築している。盛土表面には馬蹄痕を含む小凹凸がみられ、やや硬化していた。

覆 土 表面は基本土層 VI 層で、下位は VII 層である。VI 層の厚さは盛土部も含めて平均して 5 cm 程度である。

畦畔様盛土



四十一

- 1 **A-B**と暗褐色土の混じり土、粘性や中強、粘性や中弱。

2 A-Bと暗褐色粘土の混じり土、細まりや中強、粘性強。

3 VR 黒褐色土（10YR2/1） 粘性土や中強、粘性弱。明瞭な色土を多少含む。

4 VRB 黑褐色砂質土（10YR3/2） 粘まり中強、粘性や中強。ローム（As-AP） 和 φ = 5 ~ 10mm を少量含む。炭化物粒 $\leq 5\text{ mm}$ をわずかに含む。VI値が高め？

5 VRB 暗褐色粘土（10YR5/1） 粘まりや中強、粘性強。酸化鉄分を少額含む。

6 DXR 鳥糞灰土（10YR6/1） 粘性土や中強、粘性強。酸化鉄分を少し含む。上面は褐色に発色。

7 黑褐色土（10YR5/3） 粘まりや中強、粘性や中強。酸化鉄分を少額含む。

8 XRF に→ 黑褐色砂質土（10YR2/2） 粘性土強、粘性や中強。日本土・ブロックφ = 5 ~ 20mm を少量含む。酸化鉄分を少額含む。As-AP 沿泥炭と混わる。

第13図 As-B下地表面検出遭構

遺 物 出土しなかった。

切土跡（第 13 図、PL.4）

位 置 調査区南西部で検出された。微高地端を人為的に削り落とした遺構である。

形状・規模 調査区西部に広がる微高地の端を、人為的に 10 ~ 15cm 削っている。切土の低地側は周囲の旧地表面に比べて 10cm ほど低くなってしまっており、このくぼみも含めて人為的造作と推定される。切土が確認された範囲は調査区南端近くの約 1.5 m の範囲で、以北の微高地縁辺では認められなかった。切土跡東のくぼみ部旧地表面には小凹凸が多く、その中には馬蹄跡のほか、より小形の動物足跡と思われるものも含まれていた。

覆 土 微高地表面は基本土層 IX 層で、下位は X 層である。切土が行われた部分は両層が削平され、削平された部分には VI 層・VII 層が堆積していた。VI 層の厚さは 5 cm 程度である。なお、IX 層の上位には As-B 混じりの IV 層が堆積していた。

遺 物 出土しなかった。

攪拌跡（第 13 図、PL.4）

位 置 調査区中央部の畦畔様盛土北東で検出された。旧地表面低位部の東寄り、微高地縁辺近くに位置する。

形状・規模 旧地表面が不規則に攪拌され、幅 0.5 ~ 1m 程、高低差 10 ~ 20cm 程度の小谷状凹凸が複数形成されている。平面的にも断面的にも形状に規則性は認められない。検出された規模は東西 3.2 m 以上 × 南北 4.0 m 以上である。造成時の搅乱範囲を挟んで南西に畦畔様盛土が隣接し、一連の遺構である可能性もあるが、確定できなかった。範囲内の旧地表面は小凹凸が多く、馬蹄痕や工具痕と推定されるものも含まれているが、いずれも規則性はみられず明確な掘削跡や盛土は認められなかった。

覆 土 As-B 一次堆積層で覆われる。

遺 物 出土しなかった。

不明痕跡（第 14 図、PL.4）

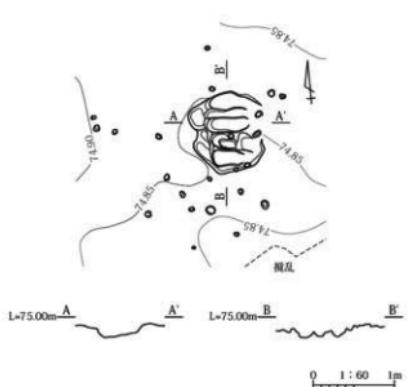
位 置 調査区南西部で検出された。切土跡に伴うくぼみ部の東に位置する。

形状・規模 旧地表面が長さ 1.1 m × 幅 0.7 m の範囲で大きく乱れているが、人為的な耕作によるものか偶発的な何らかの痕跡なのか判断に迷う。旧地表面に残る痕跡は、幅 5 ~ 10cm、深さ約 10cm、長さ約 0.5 m の数条の溝が平行に掘られ、その両脇がひれ状に、溝終端が壁状に隆起しているものである。溝の数は正確には不明であるが、検出された限りでは 4 条と思われる。既知の遺構に類例はみえず、現代の耕作作業・造成作業においても同様の作業痕は管見に触れない。

覆 土 遺構は As-B 一次堆積層に埋没していた。このことから、同テフラ降下直前の痕跡と推定される。

遺 物 出土しなかった。

備 考 馬もしくは牛が泥を後ろに蹴り出し足掻いた跡か。



第14図 不明痕跡



第15図 As-A復旧溝

第4節 As-A復旧溝

As-A 復旧溝（第 15 図）

位 置 調査区東部のSD1 覆土上面で検出された。北端は北壁から北西に延び、南端は東壁から南東へ延びる。

形状・規模 SD1 の走行方向に沿って破線状に構築される。各溝の規模は長さ 1.3 ~ 1.6 m、幅 0.2 ~ 0.3 m、深さ 0.1 m で、それらが 0.3 ~ 0.6 m 間隔で断続的に構築されている。

土　汚れたAs-Aが充填されていた。土はほとんど混入していなかった。

遺物　出土しなかった。

備考 今次調査で検出された規格的な復旧溝は本址のみであるが、微高地周縁部には散発的に A-S-A の集積がみられた。標準十層の一部でも確認できる。

第VI章 自然科学分析

第1節 はじめに

下大類芹沢遺跡の第2次調査区では、浅間Bテフラ（新井, 1979：以下As-B）や下位の粘質土層などが観察される。ただし、畦畔跡などの遺構が認められない。

今回の調査では、As-B層下の土層を対象とした植物珪酸体分析を実施し、稲作や周囲の環境に関する情報を得る。

第2節 試料

調査区内では、試料採取地点として東部、中央部、西側の3ヶ所が設定されている。

東部と中央部では、As-B下でVI層、その下位にVII層が見られる。

西側では段差（切土跡）が見られ、その構成層が下位のIX層と上位のVIII層に区分される。

この3ヶ所から、上記の6層位より各層1点ずつ、合計6点の土壤試料が採取された。これらの6点全点を対象として（第6表）、植物珪酸体の産状の違いを比較する。

第6表 植物珪酸体分析試料

地点・層位	分析試料
東部	●
	●
中央部	●
	●
西部 段差	●
	●
分析点数	6

第3節 分析方法

各試料を5g前後（湿重）で秤量する。次に過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタンゲステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下、乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求める。結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個体以下は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸める（100単位にする）。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

第4節 結果

結果を第7表と第16図に示す。各試料から検出された植物珪酸体の保存状態は概ね良好である。東部と中央部では、下位のVII層からAs-B下のVI層にかけて同様な分類群が見られ、植物珪酸体の産状も同様である。

すなわち、いずれの土層からも栽培植物であるイネ属が産出し、概して機動細胞珪酸体の含量が多い。ま

第7表 植物珪酸体含量 (個/g)

分類群	東部		中央部		西部段差	
	VI層	VII層	VI層	VII層	VIII層	IX層
イネ科葉部短細胞珪酸体						
イネ属	1,300	200	1,000	200	<100	-
タケ亜科	5,100	700	5,000	1,900	200	600
ヨシ属	8,900	500	14,500	500	600	1,300
ススキ属	5,100	300	5,500	300	100	400
イチゴツナギ亜科	800	300	1,000	-	-	-
不明	57,000	4,200	72,800	3,500	2,300	2,400
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ属	5,900	900	5,500	1,400	200	300
メダケ属	400	-	2,000	300	200	300
タケ亜科	8,900	1,000	8,500	2,900	<100	800
ヨシ属	10,500	300	10,000	500	800	1,600
ススキ属	4,200	300	5,000	600	100	300
不明	29,500	6,100	36,400	6,200	2,800	3,300
合計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	78,100	6,300	99,800	6,400	3,300	4,700
イネ科葉身機動細胞珪酸体	59,500	8,700	67,300	12,000	4,200	6,600
植物珪酸体含量	137,600	15,000	167,100	18,400	7,500	11,300
イネ科起源(その他)						
棒状珪酸体	* * *	* *	* * *	* *	*	* *
長細胞起源	*	*	*	-	*	*
毛細胞起源	* *	*	* *	*	*	* *

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)

合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている

<100: 100個/g未満

- : 未検出, * : 含有, ** : 多い, *** : 非常に多い

た、その含量も上位にかけて増加する傾向が見られる。東部のVII層では機動細胞珪酸体が900個/g、同じく中央部では機動細胞珪酸体が1,400個/gに対して、東部のVI層で機動細胞珪酸体が5,900個/g、中央部の機動細胞珪酸体で5,500個/gとなる。この他に検出される分類群は同様であり、メダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが見られる。またVI層では、ヨシ属の産出が目立つようになる。

西側切土跡のVIII層やIX層では植物珪酸体含量が概して少ない。イネ属も産出するが、その含量は数百個/g程度である。その他に検出される分類群は東部や中央部とほぼ同様であり、ヨシ属の産出が目立つ。

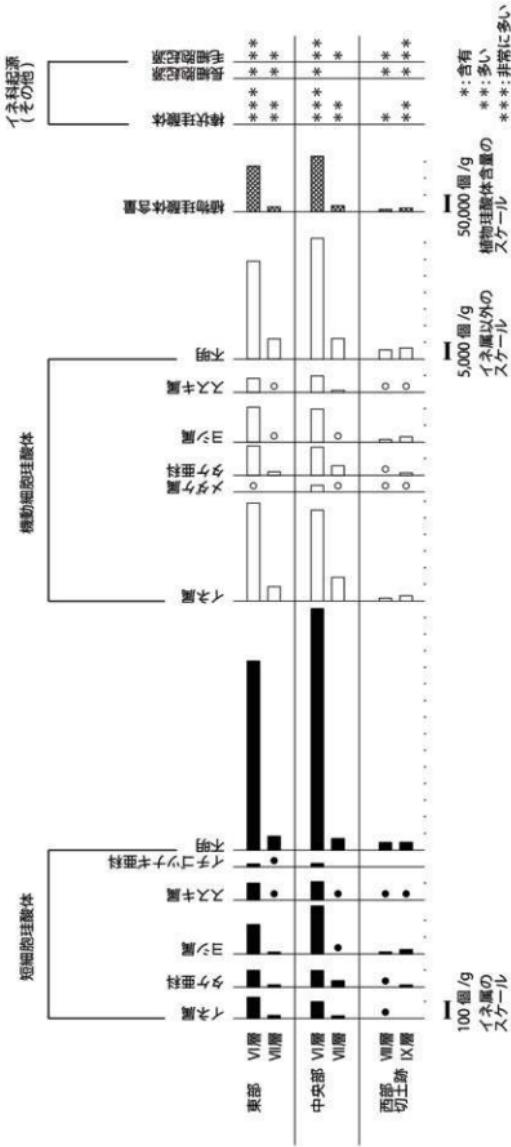
なおイネ科起源(棒状珪酸体、長細胞起源、毛細胞起源)も多く見られるものの、由来となった分類群は明確にならない。

第5節 考察

(1) 稲作について

第2次発掘区の東部と中央部では、いずれもAs-B下のVI層でイネ属が多産した。その機動細胞珪酸体含量は、東部で5,900個/g、中央部で5,500個/gであった。

安定した稻作が行われた水田址の土壤では、栽培されていたイネ属の植物珪酸体が土壤中に蓄積され、植物珪酸体含量(植物珪酸体密度)が高くなる。水田址(稻作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(機動細胞由来)が試料1g当たり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稻作が行われた可能性が高いと判断されている(杉山,2000)。



乾土 1gあたりの個数で示す。この図ではイネ属の産出を強調している。
イネ属の●は100個未満、他の○は500個未満を定性的に示す。

この事例と比較すれば、東部と中央部のVI層は稻作が行われていた場合と同等の含量と言える。また、いずれのVI層でもヨシ属の産出が目立った。ヨシ属は、湿潤な場所に生育する。これらの点を考慮すれば、今回のは As-B が降灰する以前に調査区内で水田稻作が行われていたことを反映する可能性が高いと言える。なお、下位のVII層でもイネ属が産出したものの、その含量は少なかった。また、ヨシ属も産出するが、目立つものではなかった。そのため、VII層が形成された頃には調査区内では無く、周囲で稻作が行われていたが、VI層の頃にはヨシ属が生育するような湿潤地となり、そこを利用して稻作が行われるようになった可能性がある。この点については、今後さらに調査区周辺の微地形や遺構の分布など発掘調査所見を含めて検討する必要がある。

西部のIX層とVIII層でも、イネ属が産出したことから、これらの土層が形成された頃にもイネ属が存在したことがうかがえる。しかし、その含量は少なかった。この点は、土層中にイネ属の植物珪酸体が蓄積されにくい状態にあったためと考えられる。そのため、調査地点や近傍で稻作が行われていたとしても短期間であったことあるいは堆積速度が速かったことを反映するものかもしれない。

(2) 古植生

調査区内の東部や中央部、西部の土層からはほぼ同様な分類群が検出され、メダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが見られる。そのため、各層が形成された頃には、これらのイネ科植物が生育していたと考えられる。特に、VI層ではヨシ属の産出が目立ったことから、As-B が降灰する以前にはヨシ属が生育する湿潤地になったことがうかがえる。また周辺には乾いた場所に生育する種類の多いタケ亜科やススキ属などが生育していたと思われる。

調査区内や周辺の植生については、今後さらに花粉分析や種災同定を含めた分析調査を実施することで、他の草本類や周辺の森林植生についても情報が得られると考えられる。

引用文献

- 新井房夫,1979. 関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層. 考古学ジャーナル,157,41-52.
近藤鍊三,2010. プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会,387p.
杉山真二,2000. 植物珪酸体(プラント・オパール). 辻 誠一郎(編著)考古学と自然科学3 考古学と植物学, 同成社,189-213.

第VII章　まとめ

第1節　As-B下旧地表面について

本調査区では、確認調査の段階から As-B一次堆積層が残存していることが確認されていた。周辺遺跡の調査事例から、As-B一次堆積が認められる範囲は当時において低地部であり、旧地表面はほぼ水田であったことから、本調査区も同様に B 下水田であろうと推定されていた。

調査の結果、As-B一次堆積層は調査区の中央部では確認されたが、東西端近くでは検出されず、また、As-B下旧地表面も以下のような特徴がみられた。

①旧地表面は東西端で微高地となり、中央部でくぼむ。高低差は約30cmに達し、北西—南東方向の谷状地形を呈する。東西の微高地では As-B 降下以前に当時の耕作土である黒褐色土層（VI層）が削平され、As-B直下には高崎泥流層（IX・X層）が露出していた。

②As-B一次堆積が確認された低位部で規格的な畦畔、また区画施設は確認できなかった。周辺遺跡では条里制に則った区画がみられることが多いが、本調査区は例外である。

③低位部旧地表面には馬蹄痕、耕作痕など小凹凸が多く、その高低差は10cm前後である。

以上のように、As-B一次堆積層下の旧地表面は少なくとも同テフラ降下時に傾斜・小凹凸があり、区画も設けられていなかったことから水田耕作を行っていたとは考えにくい状態であった。一方で、旧地表面には馬蹄痕、刃先痕のはか畦畔様盛土や耕耘の可能性がある攪拌跡、さらに行行為不明ながら人為的と思える痕跡などがみられ、土地の開発を試みつつあったことが推定される。また、第VI章に記したように旧地表土層からは水田址に匹敵する量の植物珪酸体が検出されている。総じて、今次調査区範囲の As-B下旧地表面は、水田と極めて近い開発途上地もしくは耕作放棄地と位置付けられるのではないだろうか。

なお、調査区西端で検出された SD2 であるが、本溝のみは地形の傾斜に沿わず、ほぼ南北方向に直線で構築されていることから、条里区画に則ったものとみることもできる。

第2節　SD1について

本遺跡東端では、近世に属する大形溝 SD1 と As-A 復旧溝が検出されている。両者ともにⅢ層下での検出で、As-B 混じりのⅣ層を掘り込んで構築される。SD1 は幅4m以上、深さ40cmを測る人工的な水路で、少なくとも一度再掘削が行われている。方向は微高地の縁に沿い、微高地に存在が推定される集落の排水、または低位部の水田への配水を目的としたものであろう。遺物の出土量が少ないことを勘案すれば、後者が主目的であった可能性が大きいように思える。出土した遺物の年代は、二次的に混入したと思われるものを除けば 17世紀前～後半期に比定され、この時期に構築・供用されていたとみてよいであろう。遺構の終焉は As-A 降下以前で、1783(天明3)年以前には完全に埋没していた。人為的に埋め戻したか否かは、堆積土層からは判断できなかつた。構築時期から領内の新田開発にともなう灌漑施設のひとつであると思えるが、江戸中期まで廃絶・埋没した事実は興味深い。

なお、本遺跡周辺には、中世～近世の城館跡・屋敷跡が数多く確認されており、本遺跡の西方至近にも「大下屋敷」が築造されている。これら城館の多くは享徳の乱(1454～1487)以後の16世紀戦乱期に成立し(群馬県教育委員会 1988)、徳川家康の関東支配以後に整理されてゆくが、SD1 出土遺物の中に 16世紀まで遡り得るものはなく、城館跡や戦国期と直接結びつく証左は得られなかつた。

主要引用・参考文献

- 飯塚恵子・五十嵐 至・田口一郎 1978 「鉢ノ宮遺跡」 高崎市教育委員会
- 白石 繁・湯浅昭平 1984 「矢中遺跡群（VI）矢中村東遺跡」 高崎市教育委員会
- 神戸聖語・中村 茂・茂田勝健 1985 「宿大類遺跡群VI 万相寺遺跡」 高崎市教育委員会
- 結城千尋・高橋 淳・齊藤圭子 1988 「矢中遺跡群（X）矢中村東C遺跡」 高崎市教育委員会
- 星野弘・桜井 南 1990 「柴崎村間遺跡」 高崎市道路調査会
- 久保泰博 1993 「柴崎遺跡群 南大類遺跡群」 高崎市教育委員会
- 長井正欣・神戸聖語 1997 「高崎信頼用地遺跡」 高崎市道路調査会
- 廣津英一 1998 「柴崎熊野前遺跡」 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 金井 武 1999 「上浪五反畠遺跡」 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 岩崎耕郎・熊谷 健 2001A 「西横手遺跡群」 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 岩崎耕郎・熊谷 健 2001B 「宿横手三波川遺跡」 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 谷藤保彦 2002 「上浪櫻町北遺跡・上浪II遺跡」 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 角田真也・小泉範明・閑川 修 2002 「高崎情報団地II遺跡」 高崎市教育委員会
- 福嶋正史 2010 「下大類・中道下遺跡」 高崎市教育委員会
- 麻生敏隆・岩崎泰一・大西雅弘・神谷佳明・伊澤泰史・閑 啓彦 2011 「柴崎熊野前遺跡II」 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 浅間 陽 2014 「柴崎屋敷遺跡」 高崎市教育委員会
- 常深 尚・矢島 浩 2017 「下中筋天神裏遺跡3」 高崎市教育委員会
- 秋山真好・高尾将矢・矢島 浩 2018 「元鳥名中子遺跡」 高崎市教育委員会
- 松村春樹・山田誠司 2019 「宮原町遺跡3」 高崎市教育委員会
- 井上 太・春里桃子・矢島 浩 2020 「矢中野榮遺跡」
- 群馬県 1938 「上毛古墳綜観」 群馬県史跡名勝天然記念物調査報告第5輯
- 群馬県教育委員会 1988 「群馬県の中世城館路」
- 群馬県史編さん委員会 1985 「群馬県史 資料編4 原始古代4」 群馬県
- 群馬県史編さん委員会 1986 「群馬県史 資料編2 原始古代2」 群馬県
- 群馬県史編さん委員会 1990 「群馬県史 通史編I 原始古代1」 群馬県
- 高崎市教育委員会 1998 「高崎市遺跡分布地図」 高崎市
- 高崎市市史編さん委員会 1996 「新編 高崎市史 資料編3 中世I」 高崎市
- 高崎市市史編さん委員会 1998 「新編 高崎市史 資料編1 原始古代I」 高崎市
- 高崎市市史編さん委員会 1999 「新編 高崎市史 資料編2 原始古代II」 高崎市
- 高崎市市史編さん委員会 2003 「新編 高崎市史 通史編I 原始古代」 高崎市

写 真 図 版



調査区遠景（西から）



調査区全景（上が北）



調査区完掘状況（東から）



SD1 完掘状況（南から）



SD2A 完掘状況（南東から）



SD2B 完掘状況（南東から）



SD2B 断面（南から）



P1 完掘状況（南から）



As-B 下旧地表面（低位部 南から）



畦畔様盛土（南から）



畦畔様盛土断面（南から）



切土跡と微高地（南東から）



切土跡断面（南から）



不明痕跡（北東から）



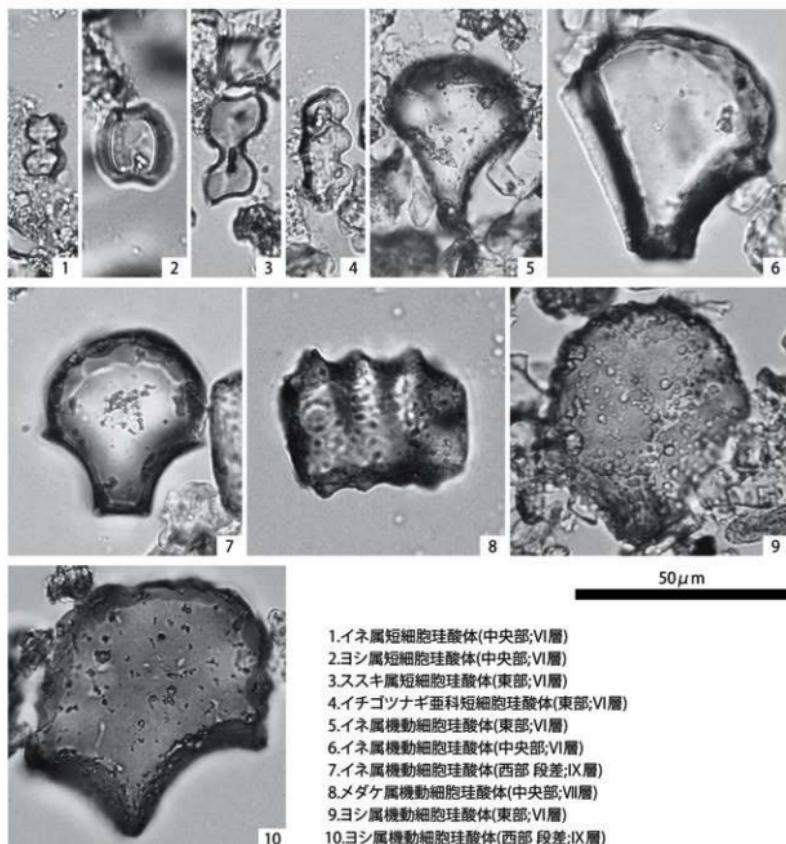
調査区南東端基本土層（北から）



SD1 出土遺物



SD2 出土遺物



植物珪酸体

報告書抄録

フリガナ	シモオルイセリザワイセキ2
書名	下大類芹沢遺跡2
副書名	倉庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
卷次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第480集
編著者名	福嶋正史
編集機関	株式会社シン技術コンサル
所在地	〒370-1135 群馬県佐波郡玉村町板井311-1
発行年月日	2022年12月28日

所取遺跡名	所在地 市町村	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
シモオルイセリザワイセキ2 下大類芹沢遺跡2	高崎市下大類町 1258番地1	102024	851	36° 18' 41"	139° 03' 55"	2022.8.17 ~ 2022.9.7	418m ²	倉庫 建設

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
シモオルイセリザワイセキ2 下大類芹沢遺跡2	生産跡	古代	溝 畦畔様盛土 切土跡 搅拌跡	土師器・須恵器	As-B下旧地表面 で検出
	生産跡	近世	溝 復旧溝	陶磁器	
要約	高崎市東部の井野川低地帯に立地する遺跡で、As-B一次堆積層と直下の旧地表面を検出した。旧地表面は北西-南東に開析された緩い谷状地形を呈し、水田址とは認められなかったが、As-Bで埋没した溝のほか、畦畔様盛土、切土跡、搅拌跡と共に馬蹄痕と刃先痕が検出されたことから何らかの土地改良作業が行われたことを伺わせる。上位ではAs-A降下以前の溝とAs-A復旧溝が検出され、周辺で生産活動が行われていたことが想定される。				

下大類芹沢遺跡2

—倉庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

令和4年12月26日 印刷

令和4年12月28日 発行

編集／株式会社シン技術コンサル

群馬県佐波郡玉村町板井311-1 電話 0270-65-2777

発行／高崎市教育委員会

群馬県高崎市高松町35番地1 電話 027-321-1291

印刷／細谷印刷有限会社